

# 市史だより

F u k u o k a

22

史的再発見マガジン  
[シダヨリ・フクオカ]

Summer 2016

TAKE FREE

## 特集 人が集まる「ニュータウン」 シーサイドももち

contents

- 09 部会だより (考古・古代・中世・近世・近現代・民俗)
- 10 「新修 福岡市史」 ナナメ読み
- 11 連載コラム「タイムマシンでとなりの駅へ」
- 12 連載コラム「福岡市史への歩み」

特集

# 人が集まる「ニュータウン」 シーサイドももち

海を埋め立ててつくられた新しいまち「シーサイドももち」。個性的なのは、その姿だけではないようです。

文＝市史編さん室



## ○ 海だったまち

「シーサイドももち」は、中央区地行浜と早良区百道浜とを合わせた地域の愛称です。昭和六十一（一九八六）年にこの名が決まり、今年でちょうど三〇年を迎えました。海を埋め立ててつくられたまちですが、かつては海水浴場として賑わった場所ですので、海だった頃の景色をご記憶の方も多いいのではないでしょうか。

この地域の海水浴場としての利用は古く、明治時代の終わりには、近隣の学校が水泳の授業をしていたことが、当時の新聞に取り上げられています。

娯楽施設としての海水浴場が先に開かれたのは、

地行の方でした。大正四（一九一五）年、路面電車を運営する九州電灯鉄道（旧 福博電気軌道）が納涼場を開設し、水泳場をもうけました。同社は、近くの伊崎浦（西公園下一帯）で、すでに海水浴場の経営経験を持っていました。

百道海岸に福岡日日新聞社が海水浴場を開設するのは、その三年後のことです。開設当初は、海に向かっている大棧橋を境に、東側の海を男性用、西側の海を女性用に分けていました。海上には滑り台・飛び込み台・水上土俵などの遊具を備え、陸にはテニスコートやビアホールなどもありました。時には花火大会も開かれるなど、毎夏、白砂青松が美しくカーブを描くこの地域は、大変賑わいを見せたそうです。

## ○ 意外に古い埋め立て計画

第二次世界大戦後に日本が高度経済成長を見せるなか、福岡市は工業を強化し、コンビナートの建設を目指しました。あわせて、増え続ける都市人口に備える必要にも迫られていきました。こうしたなかで、博多港の開発計画の一つとして、百道地区の埋め立てが現れてきます。

昭和三十五年、国の港湾審議会による港湾計画に（当時の博多港は重要港湾に指定されていたため、国で港湾計画が審議された）、百道地区の一二九万平方メートルの埋め立てが盛り込まれました。これによると、博多湾を広く埋め立てて臨海工業地帯をつくるのが計画され、そのなかで百道地区

# むかし



1 シーサイドももちが、まだ海だった頃。毎年夏になると、多くの海水浴客で賑わった。この写真は昭和 11 (1936) 年発行の『福岡市案内』に掲載されたもの。奥には大棧橋が見える

2 昭和 35 年に百道海水浴場で開催された盆踊り大会

3 埋め立て直後のシーサイドももち。下は同位置から見た現在の様子 (愛宕神社 (西区) の境内より撮影)



# 1990年代

西新通り交差点の一角の移り変わり。アジア太平洋博覧会が終了すると、劇団四季のミュージカル「キャッツ」の公演会場として使われた (4)。その人気から、公演は平成 2 (1990) 年 4 月 20 日から 11 月 19 日までのロングランとなった。跡地には、平成 7 年にレストラン「カーニバルプラザ」が開業 (5)。同年にその西側で営業を始めたスーパー「ボンラパス」は、平成 10 年に「カーニバルプラザ」が閉店すると、現在の場所に移った。埋め立てから 30 年というわずかに思える時間でも、まちは違った顔を見せてきた



# いま

6 閉館前日、平成 28 年 3 月 30 日のホークスタウンの西側。シーサイドももちを訪れる海外からの観光客を乗せたバスが次々に発着していた

7 シーサイドももちのガイドマップ。シーサイドももちの要所のほか、最寄り駅である地下鉄唐人町駅・西新駅・藤崎駅前にも置かれている。いずれも地行浜 (中央区) と百道浜 (早良区) とを合わせて、区境を越えた一つのまち「シーサイドももち」として案内しているのが特徴。観光地らしく、公共交通や文化施設などが 3 カ国語で記されている

8 海浜公園は観光客だけでなく、日々の散歩やジョギングにも利用されている

9 シーサイドももちのいたる所に見られる花壇。地域住民によって育てられる季節の花々が、訪れる人々の目を楽しませている

の埋め立て地は、新しい工業地帯で働く人々を含めた人口増加に応じる、住宅地として位置づけられています。

この港湾計画は、翌年に福岡市がはじめて作成した「福岡市総合計画」にも記載されました。ここでは、百道地区の埋め立ては、福岡市の住宅難を解消し、かつ職住近接の理想にもかなうと説明されています (当時、住宅地を増やすために全国各地でつくられたニュータウンは、職場と住宅が遠いことが問題となっていた)。

なぜ広い埋め立て地のなかで、特に百道地区が住宅地に割り当てられたのかは明らかではありませんが、すでに昭和十年に、百道が自然の美しさを保護する「風致地区」に指定されていたことや、「福岡市総合計画」の別の箇所では、元寇防塁が残り、玄海 (げんかい) 国定公園にも連なる博多湾西側の自然を残したいと述べていることが、背景にあるのかもしれません。

## ● 社会の変化にこたえる

昭和四十年代に入ると、福岡市は工業化ではなく、商都としての道を選び、大工場が並ぶ臨海工業地帯は計画から消えましたが、都市人口の増加は変わらず進んでいきました。また、高度経済成長期は、海の汚染が深刻化したり、余暇の過ごし方が多様化したりした時期でもあります。百道

の海水浴場でも、進行する水質の悪化が問題と  
なっていました。このような社会の変化を反映し  
て、昭和四十六年の「福岡市総合計画」の改訂で  
は、百道地区の埋め立て地に、住宅難の解消に加  
え、臨海遊歩道および人工海浜による美しい海岸  
線の回復や、スポーツ・レクリエーション地区と  
しての利用が期待されるようになりました。

そして、昭和四十七年の国の港湾審議会におい  
て、埋め立て面積が地行・百道地区の一四〇万平  
方メートルとされ、今とほぼ同じ規模になりました  
。昭和五十一年の「福岡市総合計画」の改訂で  
は、この地区を「地行・百道ニュータウン」と称  
しています。さらにのちには、国際化や情報化に  
応じるまちとも位置付けられるようになりました。  
なお、こうしている間の昭和五十年には、水質  
悪化によって、長年親しまれた百道海岸の海水浴  
場はついに閉鎖されました。

### ●海を活かす

昭和五十七年に始められた埋め立て工事は、同  
六十一年に完了しました。人工海浜には、当初、  
南北二〇メートル幅で東西にのびる緑地帯が計画  
されていましたが、最終的には、倍の四〇メート  
ル幅にまで増やされました。そしてそこに、民間  
の「はかた夢松原の会」の協力によって、計画よ  
りも多くのクロマツが植えられたことで、かつて

の美しい海岸を思い起こさせる景色が広がること  
となりました。

平成元（一九八九）年、まちのシンボルとなる  
福岡タワーが完成すると、アジア太平洋博覧会（よ  
かトピア）が開催されました（『五ページ』）。博覧  
会の終了後には、まちづくりが本格化し、学校・  
博物館・図書館といった「学ぶ」、ソフトリサー  
チパークをはじめとする「働く」、マリゾンやドー  
ム型球場（現福岡ヤフオクドーム）などの「楽  
しむ」ための建物が立ち並び、これに領事館・病  
院・放送局や、公園・緑地・都市高速道路なども  
加わって、さまざまな顔を持つまちができあがり  
ました（『六・七ページ』）。

「住む」ための住宅も、著名な建築家らによつ  
て個性的な形のがつくりられていきました。そ  
のなかには、福岡が古くから海に開かれた都市で  
あることをふまえ、陽当たりの面ではさけられる  
ことの多い北側（海側）に住空間を開いて設計さ  
れたものもあります。

こうして海を活かしながらできあがった「シー  
サイドももち」は、今では博多や天神とならぶ福  
岡市の顔となっています。

### ●珍しいニュータウン

近年、高度経済成長期につくられたニュータウ  
ンは、住人の世代交代の時期を迎え、人の行き来

が減り、活気が薄れていくことが懸念されていま  
す。ところが、後発のニュータウンとはいえず、「シー  
サイドももち」は「住む」だけではない、毎日  
出勤する「働く」まち、「学ぶ」ために通うまち、  
国内外からの観光客や娯楽を求める人びとが「楽  
しむ」まちとして、元氣な姿を見せています。こ  
こは日々、人が集まるニュータウンなのです。こ  
れは全国的に見て、まれなニュータウンの姿で  
しょう。「住む」人々も、防犯や清掃活動、花づ  
くりで代表される景観の美化など、外から来る人  
を意識したまちづくりを共同して行っており、そ  
れが住人どうしの結びつきを深めることにもなっ  
ています。

また、新しいまちであるため、歴史がないとも  
考えられがちですが、その計画過程もまちの歴史  
の一つといえます。そこでは、都市として成長し  
ていく福岡市の社会状況が、随時反映されてきま  
した。さらに、古くは元寇防塁、新しくは白砂青  
松の海水浴場の姿を思い浮かべながら、海ととも  
に生きてきた福岡の長い歴史がおおいに参照され  
ています。

その意味で「シーサイドももち」は、福岡の歴  
史を一気に読み込んでできたまちともいえるで  
しょう。「上書き都市」福岡のまちらしく、一見  
すると都会的で新しいその姿のなかにも、たくさ  
んの「歴史」が隠されているのです。

# アジア太平洋博覧会—福岡'89 よかとピア (1989年)



「アジア太平洋博覧会—福岡'89」(愛称:よかとピア)は、「新しい世界であいを求めて」をテーマに開かれた博覧会です。シーサイドももちを会場に、1989年3月17日から9月3日まで171日間にわたって開催されました。

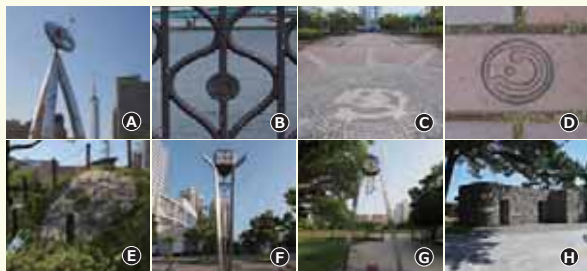
会場内の「アジア太平洋ゾーン」では、福岡タワーを中心に川がめぐり、アジア太平洋地域の樹木が茂るなか、アジア太平洋諸国の歴史や文化が体験できました。また、その周囲に配置された「バビロンゾーン」では、未来社会にふれられるハイテクな展示が人気を博しました。

会場内では展示だけでなく、イベントも積極的に開かれ、各バビリオンものも含めると、その公演回数は8000回をはるかに超えました。約823万人が訪れた「よかとピア」の期間は、福岡市中が祭りのお祭りのようでした。

## 博覧会の様子



## 隠れた「よかとピア遺産」



### 博覧会の様子

① 大きなアーチが印象的だった南ゲート。アジア太平洋諸国との交流の架け橋をイメージしていました。南ゲートから福岡タワーへと続くメインストリートは、現在の福岡市博物館と福岡市総合図書館の間の道(サザエさん通り)にあたります。今も残る小川「せせらぎ」や、モニュメント「ウォーターランド」(製作:菊竹清文)が、当時の様子を伝えてくれています。② 東ゲートとプレイルランドの間に「ガイドウェイバス」が結んでいました。道路ではバス、軌道では電車として走行し、会期中約88万人が利用しました。③ メインストリートを福岡タワーに向かってまっすぐ歩き、スリランカのお祭りや飾られる「バンドール」をくぐると、「であいの広場」が目の前に広がります。広場は連日イベントで賑わいました。5月3日・4日はどことなく舞台ももうけられ、延べ3,500人のどんたく隊が参加しました。④ オーシャンライナー。樋井川河口に渡船場をもうけ、博覧会場と海の中間を15分で結んでいました。現在もマリノアと海の中間との間には、「うみなかライン」が運航しています。⑤ 西部ガスミュージアム(設計:葉デザイン事務所)。自然現象と科学・アートを結びつけた展示が行われました。博覧会終了後も文化施設として残され、その独特な形の建物は、なごらにシーサイドももちの顔の一つでした(2003年に閉館)。

### 隠れた「よかとピア遺産」

福岡タワーや、南ゲート跡に残るモニュメント「ウォーターランド」(A)だけでなく、シーサイドももちには、隠れた「よかとピア遺産」があります。たとえば、シンボルマーク。よかとピア橋の欄干(B)、福岡タワーに通じる石畳(C)、百道浜地区の歩道の赤いタイル(D)には、今でもこっそりとよかとピアのマークが隠れています。Eは「世界の建築家通り」や、山王病院前などに多く点在。現在、百道中央公園の北東隅に置かれている五円玉のように穴が開いた丸い石(F)は、マイクロネシア連邦ツップ島の石貨で、とうきゅうトロピカル・ビレッジに展示されていたものです。直径3m、重さは4トンもあります。福岡タワー前と百道中央公園にある時計塔(G・H)や、海浜公園のトイレ(H)も、もともとは博覧会で使用されていました。ほかにもまだまだたくさん。シーサイドももちを歩く際には、ぜひ探してみてください。

## 参考文献・資料所蔵・協力

【参考文献】『アジア太平洋博覧会—福岡'89 公式記録』(財団法人 アジア太平洋博覧会協会、1990年) ● 『アジア太平洋博覧会—福岡'89 西部ガスミュージアムの記録』(西部ガス株式会社、1989年) ● 麻生美希『福岡市とその近郊における近代海浜リゾートの成立に関する研究』(『都市計画論文集』50-3、日本都市計画学会、2015年) ● 石橋知也「戦後期の福岡市政における臨海部開発の計画経緯と影響に関する研究」(2014年/ http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/1470649/eng1595.pdf) ● 岡道也『福岡の都市空間(その1~5)』(URC 都市科学52~56、福岡都市科学研究所、2002~2003年) ● 金炯義・出口敦『博多湾臨海部における土地利用の変遷過程と計画課題』(九州大学大学院人間環境学研究院紀要 都市・建築学研究119、2011年) ● 篠原雅武『生かされたニュータウン—未来空間の哲学—』(青土社、2015年) ● Ishoeh yoh 1970-2000—葉祥栄の建築—(かたり文庫、2000年) ● 『特集 海上公園の役割と展望』(『都市公園』208、東京都公園協会、2015年) ● 『特集 町づくりとしての博覧会—横浜博・よかとピア—』(『新建築』64-5、新建築社、1989年) ● 『西日本鉄道百年史』(西日本鉄道株式会社、2008年) ● 『博多港史—開港百周年記念—』(福岡市港湾局、2000年) ● 『福岡市史 第11巻 昭和編続編(3)』(福岡市役所、1992年) ● 『福岡市史 昭和編資料集・続編(1)』(福岡市役所、1997年) ● 福岡市博物館長(有馬学)ブログ(2015年10月1日/ http://fomuseum-arima.blogspot.jp/) ● 『特集 水辺都市』『FUKUOKA STYLE』Vol.1(福岡綜合印刷株式会社、1991年) ● 『毎日グラフ』(1989年8月27日号、毎日新聞社、1989年) ● 宮脇隆建築研究室編『コモンで街をつくる—宮脇隆の住宅地設計—』(丸善プラネット株式会社、1999年) ● 三浦紀之『水辺都市・福岡の試み』(FRONT64(通巻64)、リバーフロント整備センター、1994年) ● 森田昌嗣ほか『サザエさん通り』のまちづくりデザイン—福岡市早良区での産学官民協働による取組を事例として—(『芸術工学研究』24、2016年) 【写真転載】P.3 ① 『福岡市案内』(博多商工会議所、1936年) ● P.5 中段②・④ 『アジア太平洋博覧会—福岡'89 公式記録』(財団法人 アジア太平洋博覧会協会、1990年) ● P.5 上段空撮写真 『福岡県航空写真集 ふるさと飛行 平成元年版』(西日本新聞社、1989年) ● P.5 中段⑤ 『アジア太平洋博覧会—福岡'89 公式記録』(財団法人 アジア太平洋博覧会協会、1989年) ● 図版作成) P.5 よかとピア会場図下回 ▶ 馬場昭夫 / 会場図 ▶ 『アジア太平洋博覧会—福岡'89 公式記録』会場全体図・『福岡県航空写真集 ふるさと飛行 平成元年版』を基に市史編さん室にて作成 ● P.8. シーサイドももち MAP ▶ ピーランドエル【写真所蔵】株式会社ダスキン ▶ P.3 ⑤ ● 駐福岡大韓民国総領事館 ▶ P.6 ⑥ ● 西日本新聞社 ▶ P.3 ② / P.5 中段③ ● 福岡市博物館 ▶ P.3 ③・④・P.5 中段① 【協力】 学校法人西南学院 ● 地行浜一丁目町内会 ● 福岡市南当仁公民館 ● 福岡市百道浜公民館 ● 福岡市立百道浜小学校 ● 三浦紀之建築工房 ● 百道浜校区自治協議会

※ 記載した以外の写真は、すべて市史編さん室所蔵



まだあるよ！  
下段は  
イラストで  
探してね！



# ももち 図鑑

## できるまで

んあります。また公園・緑地や公開空地が多  
つが徐々に積み重ねること、今のまちの景  
を一から追うことができるのも、新しくでき  
ドももちの景色がどのようにできてきたか、  
時間にそって並べなおすと、また違ったよう

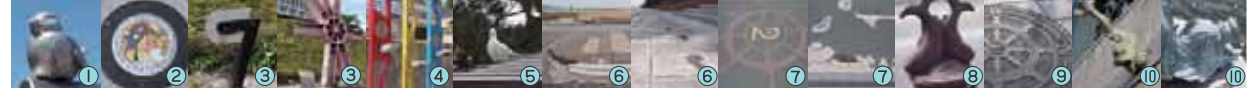
メントのまちでもあります。それらは、形も、  
ないと見過ごしてしまうものもあります。こ  
た。8ページの地図には、番号やイラストで  
サイドももちを歩く際にぜひ探してみてください

★ = 福岡市都市景観賞受賞  
※ 各団体の年史・各種住宅地図・不動産情報等を参考に作成  
(個人住宅については割愛した)



GO!

シーサイドももちにはたくさんモニュメントがあるよ！  
番号は8ページのMAPに对应しているの  
どこにあるか探してみてね！



百道浜橋 1987年竣工  
百道2号緑道 1987年竣工  
百道1号緑道 1988年竣工  
地行浜橋 1988年竣工  
なぎさ橋 1988年竣工  
百道中央公園 1988年竣工  
早良消防署 1988年竣工



福岡タワー★ 1989年竣工  
シーサイドももち海浜公園 地行浜地区★ 1989年竣工  
シーサイドももち地行浜地区 松原と遊歩道 1989年竣工  
シーサイドももち海浜公園 百道浜地区★ 1989年竣工  
シーサイドももち百道浜地区 松原と遊歩道 1989年竣工  
ネクサス百道M (世界の建築家 通り:マイケル・クレイヴス様)★ 1989年竣工  
ネクサス百道S (世界の建築家 通り:スタンリー・タイガーマン様)★ 1989年竣工



シーサイドももちイーストステージ 1989年竣工  
シーサイドももちイーストステージ広場 1989年竣工  
百道浜1号緑地 1989年竣工  
百道浜西緑地 1989年竣工  
百道浜西公園 1989年竣工  
スリーMハイツ 1989年竣工  
百道浜公民館 1990年竣工



ザ・レジデンシャルスイート福岡★ 1992年竣工  
福岡市医師会 看護専門学校 福岡市急患診療センター 1992年竣工  
シーサイドももちクリスタージュ 1992年竣工  
ふれあい橋★ 1993年竣工  
シーサイドももちアクアコート★ 1993年竣工



百道浜中公園 1993年竣工  
百道浜北公園 1993年竣工  
ネクサスシーサイド百道 1994年竣工  
シーサイドももちセンターステージ 1994~1996年竣工  
シーサイドももちセンターステージ エアロギャラリー 1994年竣工



地行中央公園★ 1994年竣工  
県百道浜職員住宅 1994年竣工  
九電工 百道地区営業所 (竣工時は oh オルゴール) 1994年竣工  
サンティパークももち 1995年竣工  
ヒルトン福岡シーホーク★ 1995年竣工



福岡百道浜郵便局 1995年竣工  
福岡市総合図書館 1995年竣工 (1996年開館)  
福岡 SPR センタービル 1996年竣工  
富士通九州 R&D センター 1996年竣工  
国際医療福祉大学 (竣工時はパナソニック九州マルチメディアセンター) 1996年竣工  
日立九州ビル 1996年竣工  
日立九州ビル 遊歩道 1996年竣工



ツイズももちビル 1996年竣工  
AIT ビル 1996年竣工  
福岡市保健環境研究所 まもる一む福岡 1997年竣工  
AI ビル 1998年竣工  
百道浜パークハウス 1998年竣工  
百道浜パークハウス 公開空地 1998年竣工  
早良警察署 百道浜交番 1999年竣工



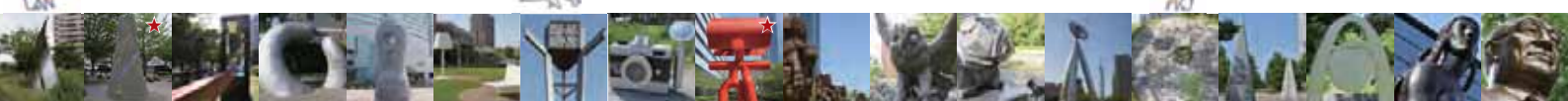
福岡市子ども総合相談センター えがお館 2003年竣工  
百道タワー 2004年竣工  
百道タワー 公開空地 2004年竣工  
福岡システム LSI 総合開発センター 2004年竣工  
グランドメゾン百道浜 2007年竣工  
アンペレーナ百道 2008年竣工  
アンペレーナ百道 公開空地 2008年竣工

# シーサイド 建物

今のまちが

シーサイドももちには個性的な建物がたくさんあり、その特徴の一つです。それら一つ一色ができました。そうした景色ができた順番たまちならではのこと。ここでは、シーサイ順番に並べてみました。見慣れた街の景色にも見えてきます。

そして、シーサイドもちはアートやモニュ大きさも、内容もさまざま。よく目をこらさのページの上下には代表的なものを並べしそのおおまかな位置を記していますので、シーさい。



# シーサイドももち MAP





## ● 考古

市内の遺跡を福岡市文化財部が調査した際、そこから出土した遺物などは、まず発掘調査報告書の作成を経て整理され、写真や図面、記録類などととも博多区井相田の福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されます。しかし、他の自治体や研究機関などによって発掘調査が行われた場合や、発掘調査以外で収集された遺物などの場合、福岡市以外の機関が資料を所蔵していることがあります。平成三十二年刊行の『資料編 考古2』では、このような福岡市以外が所蔵・保管している福岡市内遺跡の資料情報を集めて収録する予定です。

## ● 近世

『資料編 近世3』の掲載予定史料のなかに、「長政公御入国より二百年町家由緒記」があります。この史料は黒田長政が筑前へ入国して二百年を迎える節目に際して、寛政十二(一八〇〇)年にまとめられたものです。福岡・博多の町人のうち、「次第」のある四七家から提出された各家の由緒や、その家で所蔵する史料がまとめられています。

これを聞いただけでも、どうして四七家なの？ ここでいわれている「次第」とは何？ など気になる点が……。現在鋭意編集中です。その答えは刊行後にじっくりとご確認いただければと思います。

## ● 古代

『資料編 古代』に掲載するため、さまざまな種類の史料を集めています。少し変わったところでは、仏典の奥書もその一つです。たとえば、西教寺(滋賀県大津市)の『兩卷疏知礼記』には、「この本は太宰府の有智山明光房にあった「唐本」を、永久四(一一一六)年に書写したものである」といった奥書があります。そこには「博多津唐房」の記載も見えます。唐房はいわばチャイナタウンでしょう。これによって、古代から中世に移り変わる時代の、国際都市博多の様子を垣間見ることが出来ます。奥書は書写に関する断片的な記述が主ですが、こうした思わぬ情報を伝えてくれることがあります。

## ● 近現代

戦後、世の中は娯楽に飢えていました。本や雑誌は出せば売れる状況で、内容も哲学や保健衛生に関するものから猥雑なカストリ誌まで多種多様。しかしGHQの検閲や紙不足など、出版業界の状況は厳しいものでした。それでも福岡には検閲局が置かれたため、印刷所の支店が集まっています。また製紙業の復興が早く、引揚げ者のなかには多くの印刷技術者がいました。さらに大学があることで読み手も書き手も多かったことから、この頃福岡では多くの出版物がつけられたのです。『特別編 活字メディアの時代―近代福岡の印刷と出版』(平成二十九年刊行)では、戦後の福岡の元気な出版事情についてご紹介します。

## ● 中世

『資料編 中世3』に収録予定の「博多日記」という史料があります。鎌倉末期から南北朝の動乱を考察するうえで必須の史料として知られていますが、合戦に関する描写はかりではなく、いろいろな興味深いエピソードが収録されています。たとえば、さらされた首を見物しに行つた女性が、死んだ武将に取り憑かれてしまうというエピソードなどは、現代の心霊スポット体験談に通じるものがあります。

史料を読む際には政局や合戦の状況などに注目しがちですが、当時の人々がどのようなことをして日常を過ごしていたかに注目してみるのがなかなか面白いものです。

## ● 民俗

平成三十三年刊『民俗編三 夜と朝』のため、さまざまな資料を調べています。そのなかで、昭和半ばの福岡の観光案内本をひもといてみると、神社仏閣などの史跡に加え、食事・買物所として天神博多の百貨店、夜の遊び方として中洲の膨大なバー・キャバレーを紹介しているものがあります。

福岡には昼・夜それぞれの楽しみ方があり、歴史は古いし料理は美味しいしおまけに美人も多い……といった語り口で、想定読者は出張・転勤で来福するサラリーマンでしょう。このように流入者に訴求する福岡像、または彼らが口々に伝える福岡の体験が、現在の「福岡」のイメージを形成する一端を担っていたのかもしれない。

# 新修 福岡市史

## ナナメ読み

その2

民俗編一 春夏秋冬・起居往来

### 80年前の暮らし方・遊び方―『博多年中行事』をひもとく

少し昔の博多では、春先にタニシとアサツキをまぜ、酢味噌をつけて食べるという風習がありました。そうすることで一年間病気をしないという言い伝えがあったのです。しかし環境の変化で身近にタニシがいなくなったりして、この風習は廃れていきました。このように、ちょっと前にはあたりまえだったことも、街や人の暮らし方が変わることによって、急速に失われたり変容したりすることがあります。

『新修 福岡市史 民俗編一 春夏秋冬・起居往来』（平成二十四年発行）に、『博多年中行事』という本が全文掲載されています。昭和十年に発行された本で、著者である佐々木滋寛さんは明治三十二（一八九九）年生まれ、郷土史研究を志し、博多・福岡の風俗の研究をリードした人です。この本には、昭和初期の福岡市とその近郊で行われていた祭りやイベント、年中行事のほか、四季折々の行楽先などが月ごとにまとめられていて、その頃の博多の人々が一年間ど

うやって暮らしていたのか、その一端を知ることが出来ます。

たとえば五月の欄を見ると、松囃子や端午の節句などのおなじみの行事のほか、筥崎宮で騎射祭の祭典が、百道松原で福岡県の青年団の総会が開催されていたことなどが分かります。また五月の行楽先として、当時西公園下にあった小田部邸での藤見が

今回のナナメ読みは



A5判上製本（函入り）1,000頁  
頒価5,000円（税込）

紹介されています。小田部邸には大規模な藤棚があり、藤の開花時期には時期には一般に開放して、市内外から大勢の見物客が訪れていたようです。

たった八〇年の間に福岡は様変わりし、結果として『博多年中行事』は当時の様子を知らせてくれる貴重な資料となっています。

『民俗編一』ではほかに、昭和三十五年・平成二十二年の西日本新聞に掲載された年中行事の記事一覧や、平成二十二年に市内で行われた祭り・イベント等の総覧「福岡市歳事暦」を掲載しています。少し昔の暮らしと現代の暮らしの両方を記録することで、何がなくなり何が変化し何が今も残っているのかを見比べようとしたものです。と同時に、『博多年中行事』が今の私たちに八〇年前の様子を伝えてくれるように、『民俗編一』が数十年後にひもとかれたい時、読み手にとって「平成二十二年当時、こんなことがあったのか」という発見になれば、と考えています。



西公園下にあった「小田部の藤」  
（福岡市博物館蔵／絵葉書「福岡名所」小田部の藤）

#### 電話申込み・店頭販売

- ▷ 福岡市博物館 ミュージアムショップ（福岡市早良区百道浜 3 丁目 1-1）  
☎ 092-823-2800

#### お問い合わせ先

- 福岡市博物館 市史編さん室（福岡市早良区百道浜 3 丁目 1-1）  
☎ 092-845-5245

#### 店頭販売

- ▷ 福岡市情報プラザ（福岡市中央区天神 1-8-1 福岡市役所 1 階）☎ 092-733-5333
- ▷ ジュンク堂書店 福岡店（福岡市中央区天神 1-10-13）☎ 092-738-3322
- ▷ 黒木書店 長住店（福岡市城南区西長住 2-25-28）☎ 092-562-1052
- ▷ 黒木書店 七隈店（福岡市城南区七隈 8-12-16）☎ 092-871-2329



# タイムマシンで となりの駅へ

— 近過去への旅 —

第 2 回

文 = 有馬 学 (福岡市史編集委員会委員長 / 福岡市博物館長)

絵 = 新田 岳 (cubicface)

text\_Manabu ARIMA, illustration\_Takeshi NITTA

## 一身にして三生を経る？

～その1～

「一身<sup>いっしん</sup>にして二生<sup>しろうふ</sup>を経る」という言い方があります。一人の人間が全く異なる二つの人生を生きる、あるいは時代を生きるという意味ですね。もともとは福沢諭吉が1875(明治8)年に著した『文明論之概略』の「緒言」(序文)で述べたもので、少し前までは漢学を唯一の学問とした者たちが、こぞって洋学者となっている状況を表現しています。

もちろん福沢は、手のひらを返したような豹変ぶりだと批判しているのではなく、西洋文明の奔流の前に、翻弄されつつも流れに棹さすほかない人々の姿を、自身の境涯も含めて、「一身にして二生」と表現したのでしょう。

その後の歴史をたどってみると、人にそのような感慨を抱かせる時代精神の激変は、明治維新に限られるわけではないことが分かります。1945年の敗戦を境に、それまでの軍国少年(青年・壮年・老年)が、自由と民主主義の徒として振る舞うようになった経験も、「一身にして二生」でしょう。敗戦の年に生まれた私のような場合はどうでしょうか。あまり意識されることはないようですが、経済の高度成長による日本列島の激変こそは、私たちの「一身にして二生」ではないでしょうか。

私が小学校高学年の頃、日本における農林漁業従事者の割合は40%を超えていました(現在は4%台)。そう遠くない時期にイギリス並みになるよ、なんて教えてくれる先生は皆無でした。産業革命の母国イギリスでは農業人口比率はとっくにひとけた。あの頃そんな発言をしたら、教師ではなく予言者扱いだったでしょう。

その頃といえば、ちょうど高度成長の入り口ということになります(1950年代半ば)。経済学者の分析によれば高度経済成長はすでに始まっていたのですが、庶民の実感からは結果論に過ぎません。ほとんどの日本人にとっては、敗戦直後の食うや食わずの状況から脱却して、ホッと一息つける状況になったとはいえ、まだまだ日本は貧しく遅れていたのです。

1955(昭和30)年の日本はどんな社会だったでしょうか。高校進学率は全国平均でやっと50%を超えた

ばかり、県によっては中学同級生の三分の二は高校に進学しなかった(できなかった)時代です。道路は国道・県道に限っても、約6割が未舗装。乳児死亡率は39.8、つまり1,000人のうち40人弱の赤ちゃんが生後一年以内に亡くなってしまいう社会でした(現在は1.9)。

まるでどこかちがう国の話のようですね。そう、「過去は外国である」とはこのことです。一人の人間(それは私です)が、これだけ異なる時代を生きたとすれば、「一身にして二生」の資格は充分にあるのではないのでしょうか(別に威張ることではないが)。

それでは、今回のタイトルの「一身にして三生」って何? いい質問です。

そのあともう一度、「一身にして二生」に相当する変化があったというのが、私の仮説です。上で説明した「一身にして二生」が、クルマを持つことが庶民にとって夢どころか、夢としてのリアリティすらない時代から、どの家にもクルマがあることが当たり前の変化だとすると、そこからさらに、クルマを持つことへの興味が失われた時代への変化とでもいえるのでしょうか。そして、私のような人間にとっては「一身にして三生」ともいうべきこの変化が、わが福岡の地の「元気」と大いに関わってくるのですが、長くなるのでそれは次回に。



今回は、現在編さんしている『新修 福岡市史』の出発点の一つとして、平成 10 (1998) 年 11 月 6 日に開かれた「福岡市文化賞」の表彰式があったというエピソードをお話しました。新しい「福岡市史」について、庁内での検討はそれなりに進んではいましたが、論議もあったのですが（このことについては、田鍋隆男『『新修 福岡市史』が刊行されるまで』『市史研究ふくおか』第 6 号、2011 年、38 ページに詳しい）、これまで何度かお話ししてきたように、昭和 34 (1959) 年から刊行が始まった『福岡市史』の編さんがいつ終わるのか、はっきりしていなかったために、五里霧中<sup>ごりむちゆう</sup>というか、右顧左眄<sup>うごんさべん</sup>というか、明確な展望に欠けていたことは確かだったようです。そういう時に庁内の論議だけではなく、庁外および民間の研究者からの直接の一押しは、まことに時宜<sup>ときぎ</sup>を得たものとなったように思えました。ただその頃、市史編さん室は市役所の総務局統計課に所属していましたので、教育委員会にいた筆者には、市長の具体的な指示内容についても、予算要求書の内容についても分かりようはなく、市長自らが必要性を確認し、具体的に指示しようといった、その言葉を信じるだけでした。信じるに足る理由はあったのです。それは次のような当時の状況を、筆者自身がよしとしていたからにはほかなりません。

まず文化面では、市制 100 周年記念の「アジア太平洋博覧会（よかトピア）」が成功裏<sup>せいこうり</sup>に終わり、

福岡市の知名度は海外にも広まりました。この延長として、福岡アジア文化賞の創設、アジア太平洋センターの設置について、福岡アジア美術館を開館するなど、アジアの一員として、アジア文化の顕彰が進められていきました。一方、スポーツ面では、ユニバーシアード福岡大会をはじめとした大会を開催し、次代を担う世界の若人に福岡をアピールするとともに、福岡ダイエーホークスを誘致して、プロ野球への楽しみを再開させてもいました。さらには、アジア開発銀行福岡総会という金融関係の国際会議や、九州・沖縄サミット福岡蔵相会合を誘致するなど、多方面にわたって、福岡市の地盤の底上げがなされていました。この勢いで、地元福岡市の歴史・文化を集大成してくれる（この場合は「福岡市史」の編さんということですが）ものと期待していたわけです。

しかしながら、何事も思うようには進まないものです。「福岡市文化賞」の表彰式から 9 日後には、4 年ごとの福岡市長選挙が行われることになっていました。選挙に関しては、たいした争点もないように思われましたし、筆者としてはただ、市史が一步前進するという事ばかりが頭にあって、市政に変更はないとの期待感がありました。ところが結果は、案に相違して市長の交代ということになったのです。正直な印象をいわせてもらえれば、この事態は市史編さん事業にとっては、とんでもない逆風になったと感じたものでした。

### あとがき まちを記録する [シーサイドももち/中央区地行浜・早良区百道浜]

前号の編集を始めたばかりの頃だったでしょうか。福岡市史編集委員会委員長でもある有馬学館長より、「博物館が 25 周年ということもあるし、次の地域特集は“ココ”でやれないかな」との相談がありました。……え？ “ココ”ってまさか百道浜の事ですか……？ 正直最初は軽い気持ちで引き受けたのですが、ご存じのとおり百道浜はまちができてまだ 30 年ほど。過去に特集として取り上げた地域では、それぞれ違いはあれど、かなり古い時代から現代までの歴史を通史的に紹介してきたのですが、今回は当然その手法は使えません。でもココでやるからには、お隣の百道やご近所の西新まで入れたのでは意味がない。となると、近年まで海だった土地に、文字どおり「まちをつくった」シーサイドももちエリアに限られる……。このような、ある意味特殊な来歴を持つまちの「歴史」をどのように紹介するのか、そもそもシーサイドももちに「歴史」はあるのか（この答えはどうぞ特集をご覧ください）。編集担当一同、悩みに悩んで手探りのなか始めた取材方法は、まずシンプルにシーサイドももちの現状を記録することでした。現在あるすべての建物はもちろん、モニュメントや橋の飾り、マンホール、道路、植栽と、あらゆる場所をさまざまな角度から撮影し続け、結果、数カ月かけて撮ったシーサイドももち地区の写真は 5,400 枚を超えました（6・7 ページに「建物図鑑」として掲載した写真たちは、これでもほんの一部なのです）。まちの現状を記録することは、その時点での地域の記憶や意味を記録することであり、また数十年後には地域の大事な遺産の一つになるのではないのでしょうか。また今回は初の試みとして、地域 MAP を鳥瞰図風のイラストにしてみました（8 ページ）。西鉄バスの種類や不自然に道走るネコなど、意外に？ 細かい仕掛けがありますので、細部までじっくりご覧いただいて、ぜひこのまちを歩いてみてください。



海（北）からまちを見るために、うみなかラインに乗ってみました



取材中、結婚式に遭遇

福岡市史についての最新情報はこちらから。「市史だより Fukuoka」のバックナンバーも見られます！

福岡市史ホームページ ▶ <http://www.city.fukuoka.lg.jp/shishi/>

福岡市博物館の情報はこちらから。

福岡市博物館ホームページ ▶ <http://museum.city.fukuoka.jp/>

Printed in Japan.

Copyright by Fukuoka City Museum

本誌掲載の写真・図版・記事などの無断転写・転載を禁じます。